St. Luke's International University Repository

重篤な副作用＝危険な薬？

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 和弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/10514

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



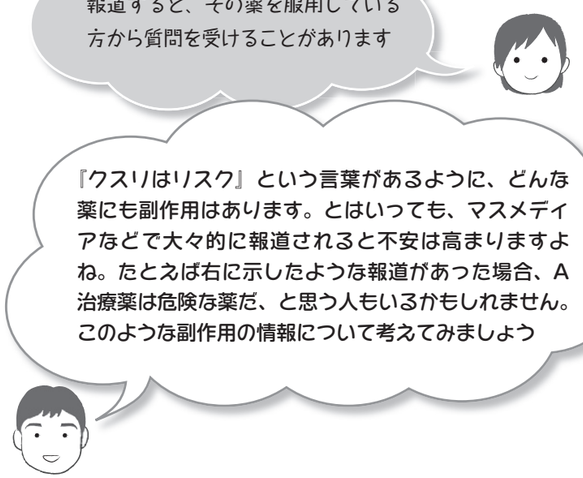


聖路加看護大学保健医療社会学・看護情報学教授
中山 和弘

重篤な副作用＝危険な薬？

A治療薬に重篤な副作用が発生！

厚生労働省は、A治療薬の服用後に意識障害をおこした例が約3年間で6件発生したと発表した。6件の意識障害は40歳代～70歳代の男女6人だった。同薬は08年5月に販売を開始。現在は年間約41万4000人が服用している。



副作用について、過度に不安を感じる人もいるように思います

確率に対する感じ方や、問題の評価は人によって異なります

このA治療薬での問題の発生件数を単純計算で1年に2件とすれば、年間の服用者数は約41万4000人なので、発生確率は約20万人に1人です。「絶対リスク」としては、かなり低いことがわかります。ジャンボ宝くじを100枚買って1等が当たる確率より小さいですね。しかし、宝くじを買う人は、身近には当たった人など見たことがなくても、それが自分におこるかもしれないと思って買うわけです。他方、買わない人は、そんなものは当たるわけがないと思っています。薬の副作用への感じ方も同じで、いくら確率が低かったとしても、人によっておこりやすさの捉え方は違うといえるでしょう。

また、前回の連載でもお伝えしましたが、リスクは問題の発生確率と問題の大きさで表されます。確率の大小とともに、その問題の価値や評価も重要な指標となります。それは、リスクのような望ましくないことだけではなく、よいことでも同じです。宝くじはなかなか当たらないと知っていても、億万長者にはなってみたいものです。一方で、20万人に1人しかおきなくても、意識障害をおこすような薬はのみたくない、という人もいます。

このように、確率の捉え方や問題の重要性の認識には個人差があります。

問題の評価に影響を与えるのはどのようなことでしょうか

情報の伝わり方によって、リスクを過大・過小評価してしまうことがあります

私たちは確率と価値の2つを考えて行動しますが、情報の伝わり方によって、問題の価値が過大または過小評価され、知らぬ間に行動が誘導されてしまうことがあります。

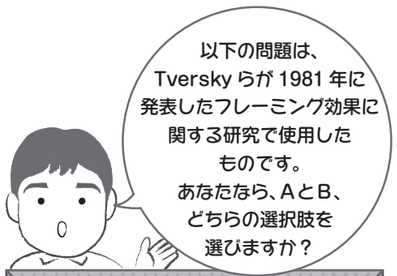
この情報化の時代には、インフルエンザの薬での異常行動の報道にあったように、滅多におこらないことであっても、注目されてマスメディアに出てきます。そうするとますます身近におこりやすいものに思えてきます。また、それが未知のものであったり、発生する理由がよくわかっていないとなれば、恐ろしさも大きくなってしまいます。このような、マスメディアでよく取り上げられるものに注意が向いてしまい、それを重大なことだと思う効果を『議題設定効果』といいます。議題によくあがることほど過大評価しやすいということです。



中山和弘先生
花子さんにヘルスリテラシーについて教え、産業保健活動をサポート。



花子さん
新米産業保健師。ヘルスリテラシーに関心をもち、中山先生のもとで勉強中。



■フレーミング効果とは？

ある町で、600 人を死亡させると予想される伝染病の対策が進められており、A案とB案が出された。

A） この対策を採用すれば、200 人の人が助かる。

B）この対策を採用すれば、3分の1の確率で 600 人が助かるが、3分の2の確率で誰も助からない。

研究によると、Aを選ぶ人が7割だったそうです。しかし、実際にはどちらの生存確率も同じです。

表現の方法（フレーム）によって、人々の判断に影響を与えることがわかります。

また、『フレーミング効果』という言葉もあります。フレーム、つまり絵画の額縁によって絵の価値が違うように見えてしまうのと同じように、どのような言葉で表現されるかによって、問題の受け止め方が変わるということです。たとえばA治療薬の副作用について、「年間41万4000人の服用者のうち、わずか0・0005％に意識障害などの副作用がみられた」といわれたらどうでしょうか。危険な薬だと感じる人は少なくなるかもしれません。

さらに、リスクの伝え方については、思わぬ逆の効果があることもあります。保健指導の現場などでもよくあることと思いますが、望ましい行動をとらないのはリスクを知らないからだと思ってリスクばかりを強調してしまうことがあります。しかし、それも度が過ぎると、リスクを回避できない場合は大きなストレスとなったり、諦めの気持ちを引き起こしてしまったりします。リスクは不確実なものですが、それに対する人々の思いもまた不確実なものだということです。その人の立場や知識、経験、情報の提供の方法でも変わってくることを覚えておく必要があります。

このようなリスクの伝え方や伝わり方のことはリスクコミュニケーションといって、研究の対象にもなっています。

適切な判断のためのポイントは何でしょう

リスクとベネフィット、両方の情報を吟味することです

薬は副作用というリスクを伴いますが、それは効果、すなわちベネフィットと引き換えです。そして、多くの薬は必ずしも100％の人に効果があるわけではないですから、ベネフィットも不確実です。人間であるからには、さまざまな人がいるので当然ともいえます。したがって、薬の副作用についての情報を聞いたときは、それだけで判断せずに、治療効果などのベネフィットと合わせて考えるべきです。もちろん、その逆も然りです。常に両方があるので、それぞれをバランスよく知る必要があります。これは、どんなリスクについてもいえることです。よりよい判断のためには、医療者などの専門家からできるだけ複数の情報を得るようにしましょう。ただし、専門家から得られるのは確率的な情報であることが多く、その価値は自分で判断する必要があります。自分が何を大切に思っているのか、自分の価値観が重要です。

なかなか判断できないときは、同じ立場にあった人がどう考えたのかを知ることも役に立ちます。経験者が書いた手記やブログ、患者会やサポートグループ、掲示板といった同じ立場の人が集まる場所を訪れてみるのもよいでしょう。

■薬の副作用に関する情報サイト

薬の副作用について調べたいときは、左のようなウェブサイトも参考になります。

○医薬品医療機器情報提供ホームページ
（独）医薬品医療機器総合機構）
http://www.info.pmda.go.jp/